2023年7月30日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

わたしに応えよ

［創世記3章1節～24節］

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前は あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で 呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き お前は彼のかかとを砕く。」神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め 彼はお前を支配する。」神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い 取って食べるなと命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して 土は茨とあざみを生えいでさせる 野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る 土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」

アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

[1] 最初の人間の「堕罪」

創世記の３章全体を読んで頂きました。長い箇所の朗読、ありがとうございました。御言葉にご一緒に耳を傾ける時間はとても大事ですよね。礼拝はよく説教がとても大事だと言われたりすることがありますが、説教そのものに価値があるというのではないのですね。「御言葉の」説教であることが大事なのであって、その意味では、説教というのは「料理」のようなものかもしれませんけれども、一番大事なのは御言葉そのものです。神の言葉という素材です。そして、その素材は正に＜逸品＞です。説教がまずい料理になっても、皆さんは〝素材″の素晴らしさを頂いてこの一週間をお過ごし頂ければと思っています。

今日の箇所は 最初の人間の「堕罪」という事柄が示されていますが、創世記はある意味神話的な表現を用いながら、ここには人間存在の本質と、罪に堕ちた人間の姿、そしてそれに対する神様の憐みということを私たち人間に示していると思います。

エデンの園に最初の二人の人間が置かれた時、彼らには「神のようになろう」などという大それた考えは思い浮かびもしなかったのではないかと思います。しかし、そのようなリスクも織り込み済みで神様は人間を造られたと思います。その証拠が「善悪の知識の木」の存在です。神様はその木の実を食べることを禁じられた訳ですが、その禁を侵すことも可能な存在として人間は造られました。何故でしょうか？神様は人間が自由な思いを持って神と共に生きることを望んでおられるからだと思います。初めの人間たちはそのように生きていたと思います。しかし、そこに‟誘惑者”が現れました。蛇ですね。この蛇という存在は何者なのでしょうか。これは一言で言うと、私は 「神様の言葉を相対化させる者」だと思います。〝サタンの使い″という表現を使っても良いかもしれませんが、「神は本当にそう言われたのですか」と、神様からではなく外からの声が心に囁くのです。実に巧みです。そのようにして、神様に聞かない内に疑いや不信が心に広がり、そうだ、私は自立しなければ！という思いの中で、神様の言葉をいつの間にか、第２のもの、第３のもの、他の人間の言葉や思想と同列のものにしてしまいます。そこには「神様への服従」なんていうことは考えられなくなります。

[2] 「神のようになる」ことによって

まずここでは女の方から蛇の唆しに乗りました。４節。「蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」この時、まだ女は「神のように善悪を知るものとなる」ということ自体、その意味も頭にのぼらず、魅力的には思ってはいなかったのではないでしょうか？しかし蛇は巧みです。あなたはまだ盲目なのだ。見えていないものがある。食べたら目が開けるぞと、まだ見ぬ世界への憧れを持たせるのですね。ここで女はストップをかけ、「まず神様に尋ねてみます」と言えば良かったのかなと思いました。また蛇の「決して死ぬことはない」というのも嘘でした。ボンヘッファーは「創造と堕落」という講義の中で「‟人間が神のようになる”ことこそ、神が「死」と名付けたこと以外のものではない」と語っています。どういうことでしょうか。人間が「神のようになる」ということは、それこそ善と悪の判断者、この世界の審判者のようになる、ということであり、どんなことでも全部自分の責任において判断し、審くことになるということです。アダムもエバからその木の実を食べるのですが、「二人は目が開け」とあります。そして「裸であることを知り…」と続きます。彼らは自分で自分を見て、恥ずかしく思ったのです。それまではそんなことはなかった。こうして、人間は「隠さなければ生きて行けない存在」になってしまいました。神様の前にまっさらな存在として出て行けなくなってしまったのですね。これが人間の真相であり、神様の審きでもあると思います。

私はこの後で、神様が「どこにいるのか」（3:9）と隠れた二人を探し当てる箇所で、神様と二人の会話がとても生々しいなぁと思いました。―「彼（アダム）は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」―ここを読んで思うことは、人間が弁解において饒舌であることです。私たちもそうですね。私たちは何か罪を冒すような時、大抵の場合は黙々とやります。やましいことを知っているのです。それこそアダムとエバの末裔である私達は善悪のものさしをどこか心得ていますから、隠れながら行うのです。しかしそれが発覚した時には、咄嗟の言葉選びのコンピューターが頭で作動して「ごめんなさい」と言えずに、あの人がこう言ったから、ああ言ったからと自分を守ることに饒舌になります。アダムとエバも正にそうでした。

そして、私はドキッとさせられたのです。それは、人間の中に罪が入り込んだ時、何が起こるかというと、信じ合っていた関係をも、外的な力によってではなく、その信頼関係がアッという間に崩れてしまうということです。本当に恐い。そしてエバはこの時のアダムの言葉に傷ついたのではないでしょうか。一方、エバの方も私が悪いのじゃない、あの蛇のせいだと言っています。責任を取れずに、むしろ他を糾弾して自己保身に走る。これが「目が開けて神のように」なった人間のなれの果てです。この時の二人の心を想像してみると、私は二人は心の中がカラッカラに渇いて、逃げ出したくなるような思いだったのではないかと思うのです。自己弁護、カムフラージュ、そのようなことを行う時、人間の心は穏やかになれません。私は自分事としてそう思います。その意味で、この創世記3章の物語ほど恐ろしい話は世の中にないと思います。罪は静かに始まって、私たちは気付かない内に坂道を転がり落ちてしまっているのではないでしょうか。

[3] 私たちに問いかける神様に応える

しかし、聖書が私たちに告げているのは、そんな転がり落ちる私たちを放って置くためではりません。救うためです！少し遡りますが、8-9節をもう一度お読みします。「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」―今、アダムとエバは「神のように」なって、自分のことは全部自分で責任を取るような存在となり、真に彼らを助ける者を失って孤独の中にいるのです。―しかし、主なる神は、そのような二人を見放しません！しかしまた強引なこともしません。彼らに「問う」のですね。自ら答え（応え）させるのです。「あなたはどこにいる？」と。この後彼らは言い繕いますが、神様は彼らを滅ぼそうとはされません。蛇を呪い、女には命の誕生させる胎と共に産みの苦しみを与え、男には生涯額に汗してパンを得る生き方を与えますが、この罪に堕ちた人間をそのまま受け入れ、園から追放しますが、この大地で死ぬまで生きることを許しました。一つには園の中央の「命の木」に手を伸ばすことから守るためです。この「命の木」とは永遠の命の木です。「キリストの十字架の木」と言っても良いかも知れません。罪人はまだこの木の実を食べることは出来ない。神様は時が訪れるまで守っています。今は、罪を覆うかのような皮の衣を二人に与え（21節）、神様との関係が終わらないように神様の方が望まれて声をかけていらっしゃるんです。私たちも同じだと思います。

8節の「風の吹くころ」というのは、聖霊の風を思い起こさせます。風は、私たちが作るのではなく、上から吹いて来るものです。神様の臨在があります。その神様が、「あなたはどこにいますか。わたしはあなたの罪を知っている。そして、今もあなたを愛している。わたしのもとに帰っていらっしゃい。独りで孤独になって生きないように。あなたがわたしに反逆しても、わたしがあなたの神なのだ。誘惑になびかず、ただわたしだけの声を聴きながら生きて欲しい」と、今日、わたしたちを呼んでいらっしゃるように思えてしようがありません。

お祈り致します。…神様、創世記のこの物語は、まるでレントゲンのように私たちの心を鋭く映し出します。最早あなたに立ち帰れなくなってしまう私たちです。しかしあなたは尚この私たちを呼んでいて下さいます。その声を聴き、あなたとの応答の中に生きる者として下さい。私たちをどこまでも憐れむ十字架の主こそ私たちの主です。感謝致します！主の御名によって祈ります。アーメン。